

アイヌの喫煙用具 (その3)

アイヌ民族にマッチが伝わる前の発火法は主に火打ちによった。それを北海道ではピウチと呼び、明らかに日本内地より伝わったものである。それ以前のアイヌ民族の発火法は木の板に穴をあけ、その穴に合う棒を垂直にあてがって、その上端を両手で挟んで錐をもむ様にし、その摩擦によって火を起こした。この発火器の材料としては、発火しやすい木なら何でも用いたらしいが、特に用いられたのがハルニレの木であった。ハルニレはアイヌ語で北海道ではチキサニ〔Chi (我ら) Kisa (こする) ni (木)〕と呼

んだ。樺太アイヌは〔カラニイ Kara (発火器) ni (木)〕と云い、専ら kara は火打ちをさす様になり火打袋をカロップ〔Karop〕と呼んでいた。この発火用具は凡て彼等の火の神より授けられたものとして、火打袋に入れて大切に腰にさげられた。

図に示した火打袋は馬場脩氏が樺太のタランドマリで採集したもので鮫の皮、或は海獣の皮等の生皮で軟質の状態の内に加工した。



カラフトアイヌの火灯袋 (カロップ)

函館空港の遺跡と

昭和49年度の調査

1. 函館空港と遺跡

函館空港は、都心から7kmほどの海岸段丘上にあるが、湯ノ川の根崎公園から進入灯が並んでみえる。空港の西側は市内に続いているともいえる。昭和36年4月に函館空港が開港され、滑走路は1,200mであったが、昭和46年には管制塔が新設されて新航空ターミナルができた。このときの滑走路は東に拡張して2,000mとなったが、この空港整備事業で空港用地内の遺跡調査が実施されている。空港のある海岸段丘には遺跡も多く、昭和42年の武内収太、吉崎昌一氏らの調査で縄文時代早期から奈良・平安時代の遺跡が9カ所、空港用地内にあることが確認されている。これらは昭和43年11月から12月にかけての調査で、その大半が発掘された。これが函館空港の遺跡調査のはじまりで、遺跡名を第1地点遺跡、第2地点遺跡というように地点別の遺跡名がつけられている。調査は函館市教育委員会に調査団が組織され、庶務班が社会教育課、調査班が市立函館博物館となっていた。

このたびの遺跡調査は、昭和48年7月の函館空港第2次整備計画によるもので、この計画によると現在の滑走路を500m東に延長して2,500mの滑走路をつくることになっている。工事計画は滑走路と進入灯および工事中に生ずる土砂の海への流入を防ぐ沈没池の設備などがあり、拡張に伴う工事面積が約25万㎡で、第4地点遺跡、中野A遺跡、中野B遺跡が工事地域内にある。これらの遺跡について昭和47年に函館開発建設部が北海道開拓記念館に分布調査を依頼し、翌48年には北海道教育庁文化課が第4地点遺跡の分布確認をしている。拡張に伴う用地買収が遅れ、遺跡の分布確認も地上観察しかできなかったようであるが、遺跡調査が具体的になってきたのは昭和49年の函館市の予算編成が終了した1月に入ってからである。26日に函館開発建設部用地課、同空港事務所、函館市企画部、銭亀沢土木事務所、函館市教育委員会社会教育課、市立函館博物館の関係



者が函館市教育委員会で函館空港遺跡の発掘打合せ会が開かれ、地元の所轄教育委員会が調査を担当することになった。約26,000㎡にわたる第4地点遺跡、中野A遺跡、中野B遺跡を3カ年で発掘と資料整理ならびに報告書作成までも終えるという前提で、その事業計画と昭和49年度予算書を30日までに提出を求められ、大変忙がしい思いをした。4月からの発掘で調査員、調査補助員、作業員の採用、発掘現場に事務室、作業員室、器材室、発電機や水道の設置、器材や資材の調達などの準備にかかったのは3月に入ってからであった。

2. 昭和49年度の調査

調査団は、調査団長三ツ谷毅一（教育長）、庶務班長阿部光房（社会教育課長）、調査班長石川政治（市立函館博物館長）、発掘担当者千代肇、調査員（嘱託）4名、調査補助員（嘱託）4名、臨時事務職員6名、作業員45名の組織で、第4地点遺跡の調査にかかった。途中阿部光房社会教育課長は8月に市立港小学校長として転出され、後任に佐藤繁義社会教育課長になった。

第4地点遺跡は、昭和43年に発掘し、縄文時代前期の住居址が60数基発見されたところである。このたびの発掘区域は新たに空港用地となる遺跡の南側にあたる丘陵の一部で、遺跡面積が8,180㎡と推定されたが12,850㎡におよび東西250m、南北70mにわたって分布していたが、北東部はブルドーザーで堅穴上部が削られていたり、破壊していたところもあった。遺跡は函館空港の東に隣接する地点で、赤坂町と中野町にまたがり、亀屋川と乳母川の上流にある沢にはさまる段丘は、北東から南西に伸びている。この丘先が第4地点遺跡の発掘予定地で、背にあたる段丘が滑走路のセンター・ラインのため削平されていた。丘先部の南はなだらかな斜面で70mほどで平坦地形となり、海岸線まで伸びているが、遺跡は削平された標高44mから南斜面にかけて残っていた。西側には旧段丘の尾根にあたる高みがあって、赤坂町と中野町の境界線が高みを南西から北東に走っている。東側は乳母川の上流の沢地で削平面より7mほど低く、この周辺まで遺物包含層が分布している。



第4地点の発掘予定面積12,850㎡のうち、10,153㎡を4月から11月の降雪時まで発掘したところ、傾斜地の尾根状の高みから北西部にかけて堅穴住居址群が発見された。堅穴は58基で、住居と考えられるもの55基が重複したり接近した配列であらわれ、これらの住居址は1本柱穴のもの、2本柱穴のもの、4本柱穴のものなどがあって、なかには同一場所に1本柱穴のあとに4本柱穴のものを建てるなど、建て直しの住居址があった。これらの住居址には炉跡がなく、屋内で煮炊きや暖炉をとった痕跡のないのが特色である。堅穴住居の形はすべて円形で、地表から住居壁まで60～80cmの深さがあり、この旧地表面を40cmほど掘り下げて堅穴住居をつくっている。住居群は、推定6,000年ほど前にある一定期間につくられたもので、住居が廃棄されたくまみに土器や石器類が投げ入れられている。住居群から

「むら」の構造やある期間における住居群の移動について、これから調べていくが、これまでに住居址以外の遺構で、貯蔵庫などの堀穴や墓坑などが21基と性格不明の葉巻き形をした土壇62基が発見されている。これから出土した土器や石器類は約12万点にのぼり、市立函館博物館で記録した図面や写真などと整理作業を行っている。

第4地点遺跡の時代は、縄文時代前期で円筒式土器文化の初頭の時代であるが、この円筒式土器文化は縄文時代前期から中期に北海道南部と東北地方北部にかけて分布している特有の縄文文化である。桔梗のサイベリ遺跡は遺跡規模も大きく、有名であるが、第4地点遺跡ではそのもっとも古い時期の「むら」が全国ではじめてあかみになったことに意義がある。

(主任：千代 肇)

天気にも恵まれた

こどもの雪まつり

冬の日を家族そろって楽しんでもらおうと、昭和46年より続けられてきた「冬の公園と博物館であそぶ会」は、今回700余名の参加者を得て1月25・26日の両日開催された。この行事は5度目になるが例年雪不足に悩まされ、特に雪像作成会は数が制限されたり、小さいもので我慢させられてきた。しかし今回は大雪で恐竜のような大きなものから、小はウサギまで70余の白い彫刻で博物館前広場が埋まった。

同時に行なわれたスケッチ会は、雪像をスケッチするものの、博物館の展示資料を丹念に見ながら描いているものなど、随所にどっかと腰をおろして頑張っている姿が見られた。おはなし会も小さな聴講者が集まり「植物のはたらきとふしぎ」(講師乳井幸教氏)という題で行なわれた。最終日の午後には雪像を見るため1,700余名の人出があり、雪像のスベリ台などに人気集中した。

このように博物館が中心となって、こどもたちとあそび

ながら学ぶ催しは、道内で市立旭川郷土博物館でも行なわれ、竹うま、わら細工など冬の生活の体験実習の場となり、市民に好評を得ている。

当博物館でも第1回目の大沼氷切道具展から以後道南民具展などを行なっているが、竹すべり会などこどものあそびを中心とした実際にやってみる催しの方が喜ばれるようである。

今後、共催後援団体である市立函館博物館友の会、函館市民美術家協会などと協力し、市民に定着しつつあるこの雪まつりをより充実したものにしてゆきたいものである。

(学芸員：岡田一彦)



第1回 日本海文化展

江差松前屏風と船ダンス

期 間：昭和50年5月1日～6月30日(無休)

会 場：市立函館博物館本館(函館公園内)

観覧料：大人160円、小人80円(団体割引あり)

※ 花見のコースにおくわえ下さい。

最近受入れた資料

- 貝類クリイロエゾボラ他36種 87点
(アラスカ・プリストリ湾)
【田口武光氏寄贈・函館市堀川町30-17】
青函連絡船模型 1点
【石畑克己氏寄贈・函館市若松町23-19】
石ベラ (アラスカ・コジヤック島) 1点
石槍 (アラスカ・コジヤック島) 1点
【藤井武治氏寄贈・函館市日吉町4丁目9-29】
硝子絵 (明治時代のもの) 1枚
【田村きよ氏寄贈・函館市栄町10-19】
国華 (昭和9年10月号) 他267点
【小熊信一郎氏寄贈・函館市大町5-5】
函館全景写真の額 1面
(明治24、5年頃のもの)
【町田利兵衛氏寄贈・函館市本町12-16】
売渡証書 (明治27年12月12日付宅地) 1通
【鈴木良治氏寄贈・函館市花園町14番501-507】
聖書複製印刷物 1枚
(ゲーテンベルク42行、1,400年頃の手法で印刷した複製)
【板垣孝雄氏寄贈・函館市末広町1-8】
置時計 (大正9年頃購入のもの セイコー社製) 1個
【室本吉彦氏寄贈・函館市末広町10-22】
鋤 1丁
【株⑨重松金物店寄贈・函館市末広町22-2】
鋳鉄製湯わかし釜 (明治初期のもの) 1個
【本間寅吉氏寄贈・函館市末広町20-18】
水差し・牛肉箱・硯・墨 一括6点
秘宝珍奇図鑑 (昭和12年1月5日発行函館新聞社) 1冊
瓦・耳だり・厚子 各1点
【清水美智氏寄贈・函館市宝来町15-8】
溪流つぎ竿 (6本組つぎ竿) 一式
【加藤東治氏寄贈・函館市谷地頭町13-4】

入館者統計

昭和49年度常設展示 (昭和49.10.1~49.12.27)

月別	館別	本館			分館			郷土資料館			総計
		個人	団体	計	個人	団体	計	個人	団体	計	
10	大人	181	31	212	2,792	273	3,065	174	15	189	3,466
	小人	89		89	213	37	250	60	83	143	482
	計	270	31	301	3,005	310	3,315	234	98	332	3,948
11	大人	126		126	1,371	75	1,446	145		145	1,717
	小人	141	11	152	67		67	85		85	304
	計	267	11	278	1,438	75	1,513	230		230	2,021
12	大人	31	25	56	297		297	81		81	384
	小人	56		56	53		53	52		52	161
	計	87	25	112	350		350	133		133	545
累計		4,945	1,866	6,811	58,394	22,972	81,366	4,197	1,061	5,258	93,435

博物館日誌抄 (48.10.26~49.5.30)

- 48.10.26 北海道史編さん所永田富智氏他2名館内見学 (本館)
26 北海道文学館主催「久保栄文学展」札幌にて開催、資料貸出す (分館)
28 科学教室<昆虫>、昆虫感謝祭 (分館)
28 東北大学考古学教授芹沢長介氏館内見学 (本館) (資料館)
31 宮城県多賀城跡調査研究所長岡田茂弘氏他1名館内見学 (本館)
11.9 上智大学教授ジョン・エック氏館内見学 (資料館)
10 市民講座<生態>講師宗像英雄氏 (本館)
18 市民講座<考古>講師金田功氏 (本館)
22 博物館協議会副委員長原忠雄氏死去
25 市民講座<民俗>講師渋谷道夫氏 (本館)
12.1 市民講座<生態>講師乳井幸教氏他1名 (本館)
2 市民講座<考古>講師金田功氏 (本館)
5 日本海事広報協会主催「勝海舟展」横浜三越百貨店にて開催、資料貸出す
9 市民講座<民俗>講師渋谷道夫氏 (本館)
16 市民講座<美術>講師武内収太氏 (本館)
49.1.20 市民講座<考古>講師武内収太氏 (本館)
27 市民講座<民俗>講師渋谷道夫氏 (本館)
27 市民講座<美術>講師武内収太氏 (本館)
2.1 第4回冬の公園と博物館であそぶ会開催 (本館)
10 日本銀行検査部長横山英之氏他3名館内見学 (本館)
10 北海道立開拓記念館副館長中村栄一氏来館 (本館)
16 市民講座<生態>講師林勝也氏他1名 (本館)
17 市民講座<民俗>講師渋谷道夫氏 (本館)
3.6 サントリー美術館員福永重樹氏他1名来館 (本館)
8 道史編集所長松山昌一氏が資料 (古銭) の件で来館 (本館)
9 市民講座<生態>講師宗像英雄氏 (本館)
10 市民講座<美術>講師武内収太氏 (本館)
10 市民講座<考古>講師村井雄二郎氏 (本館)
16 道史編さん所永田富智氏が蝦夷クリンタン資料調査のため来館 (本館)
17 市民講座<美術>講師武内収太氏 (本館)
24 市民講座<民俗>講師渋谷道夫氏 (本館)
27 日本銀行小樽支店長畑清治郎氏他1名館内見学 (本館)
4.25 東京都港区シエール社小津航二氏他2名箱館戦争資料撮影に来館 (分館)
27 函館旅の会瀬川一郎氏他60名館内見学 (資料館)
5.1 特別展「北の装い (コスチューム) 展開催 (6月30日まで) (本館)
5 市民講座<民俗>講師児玉マリ氏 (本館)
11 市民講座<生態>講師宗像和彦氏 (本館)
11 科学教室<天体>講師津川軍次郎 (分館)
12 市民講座<民俗>映画「アイヌの風俗」 (本館)
16 明治大学教授渡部真吾樹氏来館 (資料館)
19 市民講座 (特別展陳列資料説明) (本館)
21 富山県高岡市青年団45名館内見学 (本館)
24 時田可生係長厚生部に転出、渡辺捷治係長が博物館庶務係長に新任
26 市民講座映画<民俗>「アイヌの結婚式」 (本館)

Hakodate City Museum News

SARANIP—サラニップ No.12 1975.3.1発行

編集・発行 市立函館博物館 (TEL 0138-23-5480)

北海道函館市青柳町・函館公園内 (〒040)